藤宮の次期当主

みー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
藤宮の次期当主

【Ｎコード】
Ｎ３０３７Ｖ

【作者名】
みー

【あらすじ】
長く国を動かしてきた二大勢力、藤家・宮家。当主同士の敵対心から、両家は長く対立してきた。そしてどこか飄々とした藤家の次期当主・樹と、宮家の次期当主・葵。最悪の出会いをしたはずなのに、本人たちの意思に背き何故か話は両家の統合へ進む。そして前代未聞の、藤家・宮家の結婚へ！

次期当主ＶＳ次期当主！

「紅花のーー」

赤く塗られた薄い唇を開き、少女は透き通る声で唱え始めた。

両手には紅色の煙が渦巻き始め、次第にその密度を増してゆく。

「我が手に宿れ……」

唱え終わる頃には、煙は彼女の両手の中で形を変え、紅の短剣となっていた。

もしこの一連の動きをもう少し穏やかな気持ちで見ていたのなら、俺は拍手を送っていただろう。

だが事情は違う。

少女は両手の短剣を構えると敵意むき出しに俺を睨み付け、目にも留まらぬ早さで向かって来たのだ。

「ま、待てっ。おい！」

何故こんな事に！！？

ーーーーーーーー

時を遡る事一時間前。

藤家の当主・大樹（ダイジュ）に言伝を授かったその一人息子・樹（イツキ）は、長く敵対するはずの宮家を訪れていた。

国で幅を利かせる二大勢力、藤家と宮家。
王家の存在など建前。政治・経済の両面において、この国を動かしているのは実質二つの家と言っても過言ではなかった。

そして藤家・宮家の両家の主は、代々不思議な力を受け継いで来た。
煙を固体化させ、武器として自在に操る力。
その能力は、それぞれの当主の直系の血筋にしか現れず、またそれが家を継ぐものの証でもあった。

宮家はどうだか知らないが、少なくとも次期当主、樹にはその力が備わっている。

そして平たく言えば縄張り争いのようなものなのだろうが、藤家と宮家は長い間いがみ合ってきた。
現在の当主、つまり俺の親父と宮家の当主の仲が悪いのも一因である。
というか、それが諸悪の根源。

そんな親父が今日宮家の当主に言伝なんて出したので、誰もが驚いた。そして何故か名指しで派遣された俺。

宮家へ来るのは、敵地にわざわざ乗り込んでいくようなもので。
藤家のそれに匹敵する程デカい宮家の城門を前に、俺は立ち尽くしていた。

どうすっかなぁ……

とりあえず門番に取次を頼んでみる。

「ごめん、ちょっといいか？」

「はい。何でしょう」

「藤家の当主から宮家に言伝を頼まれたんだけど、通してくれない？」

門番は俺が藤家の者と分かると、その目を嫌そうに細めた。

「藤家がご当主に何の御用で……？失礼ですが、お名前を頂戴致したい」

「あ、樹です」

門番は目を丸くして、素っ頓狂な声で聞き返した。

「あの、聞き間違えたようなので、もう一度お願いします」

「だから、樹だって。藤大樹の息子の藤樹！」

俺がムキになって声を張り上げると、門番はこっちが引く程の早さで頭を下げた。

「次期当主様でしたか！そうとは知らず申し訳ありません、お許しを！」

頭が地面に着かんばかりの勢いで、平謝りされた。
いや、そんな謝らなくていいけど、早く門開けてくんないかな。
無事門を通過した後、急に懇切丁寧になった対応で恙無く奥の間まで通された。

奥の間の襖を開くと、両脇には国の政治経済を牛耳る宮家のエリート達が並んでいた。服装もエリートさながら優美なもので、全身から知的さが溢れている。
そして最奥で恭しく玉座に腰掛けるは他でもない宮家当主、葛（カズラ）。
理知的で端正な顔立ちに、当主さながらの威厳、纏うオーラが明らかに一人だけ別モノだ。

子供の頃に見た事があるらしいがぼんやりとしか覚えておらず、正式に対面するのはこれが初めてだった。
樹は妙に感服してしまった。

これが当主の風格ってやつか！
存在がギャグみたいな俺の親父とはまるで違うな。なんか当主！って感じするし、かっこ良いーっ。
つーか宮家の人たちって何でこんな頭良さそうで上品なんかな。
藤家は酒飲みの武闘派ばっかな気がするよ。まぁ、頭は切れるけど、上品さの欠片もないよな。（親父とか）

「藤家の次期当主、突然のお出ましだな」
宮家の当主から、渋く低い声が発せられた。
「ど、どうも」

すっかりオーラに魅せられて、俺はしどろもどろに返した。もっと敬意を払って話すべきなのかもしれないが、いかんせん俺には向いてない、そーいうの。

宮家のご当主は、玉座の肘掛に肘を添え、顎に手を当てて俺を値踏みするように見ている。

何か、居た堪れないな……

「それで、言伝があると？」

「はい。よく意味は分かんないですけど、一言だけ伝えて来いと言われたんで」

「言いなさい」

わざわざ来て、言うことでもないと思うんだけどなぁー。

俺は肩を竦めると、親父が言った台詞を繰り返した。

『……時は来た』と。

その瞬間、宮家のご当主が大きく目を見開かれた。

俺の言葉を耳にした辺りのどよめき方が尋常でない。

……俺、そんなまずい事言ったのかな？

ーーーーーー

そして、宮家の方達は慌ただしく何やら準備を始めた。

俺は取り残された気分で、奥の間でボケっと突っ立っていた。
葛さんもどこか行ったし、何が始まるんだろ。てか俺帰っていいのかな？
……帰っちゃえ。

樹がそう思って奥の間の襖に足を向けた時、宮家のエリート臣下の1人が目の前に跪いた。

「樹様、用意が整いました」

だから、何のだよ。

「御案内します。こちらへ」

エリート君は奥の間から、俺を宮家の稽古場まで案内した。

中へ入ると、そこは野球場を少し縮めたような空間が広がっていた。
高い天井は、曲線を描いて伸びている。中央には、稽古には十分すぎる広さに硬い土壌が広がる。
それを囲むようにして、たくさんの観客席が設置されている。

藤家の稽古場も大規模だが、宮家のもすごいなぁ。
敵ながら感心してしまう。俺、そんな敵とか思ってないけど。

ただ、其処彼処に激しい戦いの跡が残されているのが気になった。
何者かによって深く抉られた地面。この硬い土壌をこんな深く抉るなんざ、桁外れの力の持ち主に違いない。
そして更に気になるのが、同じような傷が天井にも。
どんな戦い方したら、こんな高い天井に傷がつくんだよ！？

藤家でもここまで戦えるのは、親父か、幼馴染の軍部隊長・萩(ハギ)くらいだ。俺はわからんが。

稽古場を見回している内に、宮家の方々がわらわらと観客席に座り始めた。

おっ、何か始まるのか。俺も座らしてもらえんかな。

エリート君に聞いてみた。

「ねぇ、俺もあそこ座ってていいの？」

「樹様は此方でお待ちください」

ちっ、やっぱだめか。

だが待っていたら、すぐに葛さんが現れた。稽古場の奥から歩いてくるその姿はやはり言い表せぬ格好良さがあったが、俺の視線はその隣に釘付けになった。

葛さんに連れられ、1人の少女がこちらに歩いて来る。

天使だか、妖精の類なんだかと見まごう程に美しい女の子だった。

豊かな真っ黒の髪を後ろで一つに束ね、動きやすい戦闘服に身を包んでいる。それなのに、その美しさは変わらない。

透き通るような白い肌は、形の良い薄い唇に乗せられた紅をくっきりと浮かび上がらせていた。

だがその圧倒的な美貌の中に、見え隠れするのは可愛らしさ。

恐らくそれは、彼女の印象的な大きな瞳と、少し染まった頬のせいだろう。

とにかく、すっげー可愛いんだ。

俺は多分、アホみたいに口を半開きにして穴が開く程見つめていた

と思う。

葛さんが、その美女の肩に手を添えて俺に紹介する。

「私の娘であり、宮家の次期当主・葵（アオイ）だ」

おぉ、娘か。

だからそこはかとなく、葛さんに通ずる上品なオーラが……

……って、次期当主？

この美女が、宮家の次期当主だって！？

「初めてお目にかかります、宮葵と申します」

鈴のように凛とした声が響く。

顔小さーっ。目大きいー。

宮家の子供、俺と同い年だって噂には聞いてたが、女の子だったんか！

てか、どことなく視線が鋭いというか、俺を睨んでる様に見えるのは気のせいか？

「この日をずっと、待っていました……」

え、何で？

「葵は女だが、君の相手としても申し分ない実力がある。どうか遠慮することなく、手合わせに徹して欲しい」

葛さんが、ワケ分からないことをほざき始めた。

いや、手合わせってあり得ないだろ、女の子となんて。

しかも藤家と宮家の次期当主同士が手合わせ、マズくないか？
ある意味で頭同士の抗争を意味する。親父、こうなること知ってて
俺を寄越したんかな！？

そういえば観客席に並ぶ宮家の方々も、ピリピリした緊張感を持っ
てこの対峙を眺めている。何だよ。見んなよ！

てか、何で戦うの！？

そして事情が全く飲み込めない俺を残し、物語は冒頭シーンに戻る。

勝敗と、種明かしと。

紅の短剣を両手に持った美少女もとい宮家の次期当主・宮葵は、硬い稽古場の地面に足を踏み込むと、勢いよく短剣を俺に投げつけた。

まじか！！ヤバい、ぼーっとしてたら死ぬっ！

俺は間一髪その短剣を避けた。ただ、耳元で短剣が空を切る音が聞こえ、背中に嫌な汗が流れる。

「避けたわね……」

悔しげな葵はもう片手の剣を構えると、俺に振りかざした。

何とか身を翻すようにして刃から逃れる。

「待て！あんたと戦うなんて無理だよ。やめよ。何か不満があるなら、話し合いにしよ」

あせあせ。俺は両手を顔の横に上げて、戦う気がないことを表した。

「両家の命運を賭けた勝負、覚悟がないなら、ここへ足を運ばなかったはず！」

次々と繰り出される攻撃から逃れつつ、頭を抱えたくなった。

クソ親父め……両家の命運を賭けた勝負とやらに、「ちょっとそこまで、お使い」感覚で息子を行かせやがって！

こうなったら不本意だが、何とかこの女を止めねぇと。

樹の周辺に、風が巻き起こる。

その片手には白銀の煙が渦巻き、瞬間的に手中で一本の鎖となる。
稽古場は大きく揺れた。
「何も唱えずに！？そんな事が可能なのか！」
「白銀だと！藤家の色は紺ではなかったのか？それに鎖など、これまで見たことがない！」

おわ、ナイスリアクション。
こっちも出した甲斐があったわ。どーもどーも。でもこれそんなすごいんか？

そういえば親父は何か唱えて剣を出してた気がするし、色も紺だったかな。でもそれって個人差だと思ってた。俺が変なの？

葵も驚愕の表情で、虚を突かれたように立ち尽くす。

「唱えず……しかもそんなに素早く……？」

いや、お前の短剣とさして変わらんだろ。

でも、ごめん。チャンス。
葵がはっと我に返ったが時既に遅し。弾き返そうと構えたがそうも行かず、俺の鎖が体に巻きつき身動きを取れなくしていた。
葵が小さく呻いたので、俺は慌てて鎖を緩めた。
まぁ、動けない程度にだが。

「ごめん、何か不意打ちっぽかったね。でもこれで満足した？俺、帰ってもいい？」

俺は近づいて葵に尋ねたが、鎖の中でうな垂れる葵は、言葉もない状態だった。
お、おい。そんなにショックだったんか。
そしてもっと悲嘆しているのが、稽古場の観客である宮家の方々。
まるでこの世の終わりのように嘆き悲しみに暮れている。
宮家の次期当主が負けたのがそんな悔しいか。悪いことした気がしてきたー。
「負けは負け。受け入れるわ。藤家との統合、そして次期当主の座を明け渡すこと……」
え。今何と？
後ろから歩いてきた葛さんが、少し渋面をして言う。
「圧倒的な力の差でした。軍人でも容易く避けられない葵の攻撃をかわす身のこなし。鎖を作り出す早さも然り、能力を完全に自分のモノとしている」
「はぁ、どうも。そんで、統合とか次期当主の座とかって、何の話で？」
「……本当に、何も知らずにきたようだな……」
ええ、知りませんとも。
「私と藤大樹は、若い頃から互いの能力がどちらが優れているか競い、顔を合わせれば争っていた。それが今のような両家の対立を導いてしまったのだ。君も知っているね？」

はぁ。それはもう。
俺はその下らない両家の争いに、いい加減辟易しているんだけども。だって原因ないだろ？当主が仲悪いだけじゃん。家同士が嫌い合うことに、どんなメリットが？

てかこんな理知的な人が、親父とそんな激しい喧嘩をしていたなんて信じられん。相手にしなさそうなのに……若気の至りってやつか。

「だが何度戦っても、私と大樹の間に決着はつかなかった。全くの互角なのだ。最近は刃を交えていないが、おそらく今なおそうであろう。そして、私たちはこの争いに、別の形で終止符を打つことにしたのだ」

「それが、両家の統合、ってことか」

「察しがよいな。ただ統合となると、どちらかが当主を立てなければ間違いなく内部が分裂してしまう。そこで、悩んだ末、こう決めたのだ」

『生まれた同い年の子供を対峙させ、勝った家が当主を立て負けた家を統合する。その勝負の合図は藤家から送ろう……「時が来た」と』

呆然。開いた口が塞がらない。
そんっっな一世一代の大勝負だったのか！だから葵も、宮家の方々もこんないきり立ってたんだな！

俺、そうとも知らずに見物気分で宮家に来て……しかも勝っちまった。どうしよー。

じゃあ、俺が両家統合の当主を務めるってこと！？
無理無理！藤家だけでも不安だったのに、両家が統合したらどんだけ大きな勢力になる？
そんな当主って言ったらもう、この国を統べるに等しいよ。
あー、考えただけで目眩がー。

「え、葛さん。じゃあ葵はどうなんの？次期当主の座がなんたら言ってたけど」

「葵は次期当主の座を君に明け渡し、妻としてサポートに回る」

つっ！？
ごめん、吹いたわ。
次々と明かされる突拍子も無さすぎる勝負の事実に、俺は理解をやめた。寝よ。もうダメ。帰って寝る。俺には荷が重すぎるよ。きっと起きたらまた穏やかな日常が……

「そして君には宮家の新たな当主として、これからここで暮らしてもらう」

あぁ、もう。何とでもなれ。
もはや何も返す言葉がない程に、樹は力が抜けてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3037v/

藤宮の次期当主

2011年11月24日10時48分発行